

読売

教育ネットワーク

社会はまるごと学校——
すべての大人が先生です



「冥途」を紹介し、京都決戦に出場した29人(写真下)のトップに選ばれた窪田真弓さん(写真上)。興奮冷めやらぬ中、感謝の言葉を述べた(2・3面へ)

巻頭特集 全国大学ビブリオバトル2016京都決戦

千葉大学大学院の **窪田真弓さんが優勝** 2・3

第2回 **考え、議論する道德フォーラム** 4・5

第60回日本学生科学賞入賞者決まる 6

キャリアデザインセミナーに就活生285人 7

長崎県立西陵高校新聞部がマリー・アントワネット展を取材／お知らせ・info 8

関西大学読書教養講座／葛西臨海水族園で講座 9 リレーエッセー 米ストーニーブルック大学「新しい日本観」10

2017.1

Vol.25



ゲストの3人からもパトラーに対して質問が飛んだ。(左から)紀伊国屋書店会長兼社長の高井昌史さん、女優の壮一帆さん、お笑いコンビ「笑い飯」の哲夫さん

出場 29 人の一押し本 ▲は決勝進出者

Table with 3 columns: 出場者, 紹介本, 紹介者. Lists 29 participants and their recommended books.

抜いた29人が五つのグループに分かれ、準決勝が行われた。決勝に駒を進めたのは、窪田さんのほか、長崎ウエスレヤン大学4年の藤原礼武さん、奈良大学3年の田中智浩さん、志學館大学(鹿児島県)4年の塚原辰也さん、東北福祉大学(宮城県)4年の武藤大紀さんの4人。

この日はまず、計1207人が参加した地区予選を勝ち抜いた29人が五つのグループに分かれ、準決勝が行われた。決勝に駒を進めたのは、窪田さんのほか、長崎ウエスレヤン大学4年の藤原礼武さん、奈良大学3年の田中智浩さん、志學館大学(鹿児島県)4年の塚原辰也さん、東北福祉大学(宮城県)4年の武藤大紀さんの4人。



「冥途」 内田百閒著/パロル舎

全国で1207人が参加 この日はまず、計1207人が参加した地区予選を勝ち抜いた29人が五つのグループに分かれ、準決勝が行われた。決勝に駒を進めたのは、窪田さんのほか、長崎ウエスレヤン大学4年の藤原礼武さん、奈良大学3年の田中智浩さん、志學館大学(鹿児島県)4年の塚原辰也さん、東北福祉大学(宮城県)4年の武藤大紀さんの4人。

優勝した窪田さんは、「冥途」を「高い熱を出したときにうなされる夢のような」不可思議な話18編からなる短編集と紹介した。出合いは、高校2年の現代国語の時間に配られたプリント。「蜥蜴」という短編だった。読んでも何が言いたいの



決勝で熱弁をふるう優勝した窪田真弓さん

千葉大大学院の窪田真弓さんが優勝

大学生らがお薦めの本の魅力を紹介し合い、最も読みたくなった本を聴衆の多数決で決める書評合戦「全国大学ビブリオバトル2016京都決戦」(活字文化推進会議主催、ビブリオバトル普及委員会共催、読売新聞社主管)が2016年12月18日、京都市の京都大学で開かれた。京都決戦には、全国各地で開かれた地区予選を勝ち抜いた代表29人が結集。激戦の結果、千葉大大学院1年の窪田真弓さん(23)が優勝、紹介した「冥途」(内田百閒著、パロル舎)が最高賞のグランドチャンプ本に選ばれた。

全国大学ビブリオバトル

2016京都決戦



優秀賞の藤原礼武さん(右)と武藤大紀さん

優秀賞は藤原礼武さんと武藤大紀さん

優秀賞は、藤原さんと武藤さん。藤原さんは、多くの若者が自殺する2030年の日本を舞台にした小説「アカガミ」(窪美澄著、河出書房新社)を、武藤さんは、表現の手法を変えるだけで、受け止め方が大きく変わる日本語のテクニクを紹介した実用書「ずるい日本語」(内田伸哉著、東洋経済新報社)を紹介した。



準優勝の田中智浩さん

今でも参考になる名回答も

「準グランドチャンプ本」は、田中さんが取り上げた「大正時代の身の上相談」(カタログハウス編、筑摩書房)。本書は、大正時代に読売新聞の「身の上相談」欄に載った129人分の悩みと回答をまとめたもの。田中さんは、相談者の悩みへのかみ合わない回答を紹介して会場の笑いを誘った。また、作家志望の自分に近い悩みを持つ青年の相談を披露して、「生半可な気持ちで作家になりたいと思つた考えを捨てようかと思つた」



「大正時代の身の上相談」 カタログハウス編/筑摩書房

準グランドチャンプ本



「脳の右側で描け」 ベティ・エドワーズ著/河出書房新社

特別賞

「特別賞」には、塚原さんが紹介した「脳の右側で描け」(ベティ・エドワーズ著、河出書房新社)が選ばれた。この本は右脳の働きに着目して、絵の描き方を教える内容。塚原さんは「脳の右側を使うことは、自分の創造性を高めること。卒論で行き詰まったとき、発想力の点で助けられた」と話した。



特別賞の塚原辰也さん

※パロル舎刊の「冥途」は、現在出版されていないが、岩波文庫やちくま文庫で読むことができる。

第2回 考え、議論する道徳フォーラム

評価をどうすればいいのか探る



パネルディスカッションでの質問などをまとめる参加者たち



「道徳性を育む評価」をテーマにした「第2回考え、議論する道徳フォーラム」（読売新聞東京本社主催、文部科学省委託事業）が2016年12月26日、東京都千代田区のみどり大手町ホールで開かれた。18年度以降、小中学校で道徳が「特別の教科」になっておいて、約300人の参加者が、天笠茂・千葉大特任教授の基調講演や事例発表、パネルディスカッションに熱心に聞き入った。

考え、議論する道徳

パネルディスカッション

パネルディスカッションは、松元直史・福岡市立多々良中央指導教諭、小野賢志・文科省教育課程課長補佐、西野真由美・国立教育政策研究所総括研究官の3人が登壇、松本美奈・読売新聞専門委員の司会で行われた。

西野 評価をすることで、担任は子どもへの理解を深められる。また、自己評価や友人同士の相互評価を通じて、子どもが自らを評価する力を持つようになることが一番大事だ。



西野真由美氏
国立教育政策研究所総括研究官

——道徳性は目に見えない。道徳性が育まれたか否かを見極めるための方法は。

松元 道徳ノートやワークシートなどを使い、先生がコメントを書き、返す方法が一般的では。ただ、書く力がある子とない子がいる。うまく書けない子は、授業中の発言や様子を付けて足して考える必要がある。

西野 道徳性を評価することは非常に危険で、そのような方向に立ち入っていくべきではない。しかし、内面は見られない

から見なくていい、ということではない。子どもや保護者を巻き込みながら多面的に、見えなものを捉えてくるような努力をして、見えてきたものを評価することが大切だ。

◆子どもを「見る」努力が必要
——道徳科の評価は誰がするのか。

小野 原則として学級担任が年間を通じて指導し、評価する。



小野賢志氏
文科省教育課程課長補佐

——文科省は評価のあり方について、「個々の内容項目ごとではなく、大きなまとまりを踏まえた評価とする」との方向性を示している。個々の授業での一人ひとりの子の成長を記述することこそが、評価ではないのか。

小野 長いサイクルで見たら評価を入れることはとても大事だ。

より良い見方に近づけていくために、自己評価や友達同士の評価を入れることはとても大事だ。

事例発表

◆「鉛筆対談」考え育む

事例発表では、小中学校3校の教諭が道徳の授業での取り組みと評価の事例を発表。群馬県高崎市立第一中の富岡栄・前校長がコメンテーターを務めた。



松元直史氏
福岡市立多々良中央指導教諭

松元 道徳の時間にいいことばかり言うのに、実際には行動できていない子どももいる。一度それを自覚してもらう必要がある。私は「振り返りシート」の中で、子どもが自らの成長や、友達の成長について書く項目を設けている。

西野 先生は主観的な評価になることを恐れ過ぎないでほしい。ただ、主観のずれを矯正し、

高松市立太田南小の太田浩之教諭は、「座標軸」や「鉛筆対談」などを使った、創意工夫あふれる授業の様子を紹介。「座標軸」は相対立する価値観がある場合に、自分の意見は

どうなのか、実際に行動できるか、を確かめてもらうための思考ツール。子ども自身が座標軸をノートに書く。「鉛筆対談」は、あるテーマに関する意見や友達と交互に紙に書き、多様な価値観について、考えを深めるための手段という。

福岡教育大付属小倉中の西岡和成教諭は、生徒が友達や自分自身と対話しながら、思いやりについて理解を深めていった様子を紹介した。授業を振り返った生徒の記述をもとに、通知表と指導要録の評価事例も示した。対話を促す授業を行い、授業メモと振り返りを記述したワークシートを、年間を通した評価に役立てているという。

◆「道徳ノート」評価に有効

富岡氏は「子どもの発言から授業が深まることがあるが、そうした発言がない場合の対応を考えることも授業改善の視点。評価を行い、家庭と連携するためには、道徳ノートは非常に有効」などとコメントした。



太田浩之氏
高松市立太田南小教諭

沼志帆教諭は、「多様な価値観に思いめぐらせる道徳の授業づくり」と評価に向けた取り組み」と題して、事例発表を行った。「勤労、公共の精神」という主題で行った授業での、教師の発問や子どもたちのやり取りを詳しく紹介した。

基調講演

天笠 茂 氏
千葉大特任教授

成長把握 指導に生かす



道徳科の評価は調査書に記載しない、つまり入試の可否判定には活用しないことを確認している。子どもの学習状況、道徳性にかかわる成長を継続的に把握し、指導に生かすことが重要で、数値による評価は行わない。社会、世界と関わり、よりよい人生を送る——との目標を意識しながら、①他の子どもと比較せず、一人ひとりの成長の記録を積極的に受け止め、個別の記述式の評価とする。②個々の内容項目ではなく、大きなまとまりを踏まえた評価を行う。③多面的な見方に発展しているか、道徳的価値の理解を自分との関わりでどう深化させているかを重視すること——などが肝要だ。

子どもとの人間関係づくりの中で、成長を見守り、歩みを認め、努力している姿を励ます。それにより子どもが自らの成長を実感し、さらに意欲的に取り組もうとするきっかけとなる評価を目指すべきだ。子どもの変化を見抜く鋭い視野、視線とともに人間的な温かさが、教師に問われることになるだろう。校長のリーダーシップのもと、学校全体で組織的に対処していく必要がある。

会場の声

- 横浜市立東希望が丘小・武井裕教諭
子どもの努力や頑張りを認めて、励ましていくことが道徳の評価なのだとなり、大変勉強になった。
- 埼玉県入間市立東町小・村野由佳教諭
午前中の基調講演でこれまでの流れがしっかり理解できたことが収穫だった。
- 横浜市戸塚区・主婦坂井浩美さん
保護者の立場で興味があって参加した。先生方が子どもを理解するきっかけになったらうれしい。熱心な先生方の姿に安心した。

第60回

日本学生科学賞の入賞者決まる

中学生と高校生の科学研究を対象とした「第60回日本学生科学賞」（読売新聞社主催、全日本科学教育振興委員会など共催、旭化成協賛）の入賞作品が決まった。生物、物理、化学、地学、情報技術などの応募作品6万点から、専門家の審査を経て入賞30点を選ばれた。最も優れた中高2作品に贈られた内閣総理大臣賞の研究内容を紹介する。（学生科学賞の詳細は、1月24日の読売新聞朝刊に掲載されました）

キノコ博士 砂浜での生態を解明

神戸市立上野中2年の和田匠平君（14）は自他共に認めるキノコ博士。2014年に沖縄県西表島の砂浜で採取したキノコが、シロホウライタケ属の新種と判明、後に「シロスナホウライタケ」と命名された。

今回は、前回入選2等だった研究の続編。なぜ、シロホウライタケ属のキノコは乾燥しやすく塩分濃度が高い砂浜に生えるのか。素朴な疑問を出発点に、その生態を解明しようとした。最初に調べたのは、シロホウライタケ属の分布状況と寄生する植物。標本を検討した結果、国内の砂浜に広く分布し、イネ科とカヤツリグサ科の植物に寄生することが分かった。

次に、どのように生育しているのか、神戸市の須磨海岸で観察した。すると、海岸を埋め尽くすほど、広範囲に密生する時期があった。水分を摂取しやすい降雨時などに胞子を飛ばして増えることがうかがえた。生態学者になるのが夢。「護岸工事などで砂浜が減少し、キノコの生息環境は悪化している。保護活動も見すえて研究を続けたい」と話していた。

「しなり」着目 省エネフィン

京都市立塔南高校1年の早川優希君（16）は中3だった前回、うちわが起す風の研究で、内閣総理大臣賞を受賞。今回はさらに発展させて、速く楽に泳げるフィン（足ひれ）を開発、中学、高校にまたがって2年連続で最高賞を獲得した。

前回の研究は、うちわの「しなり」と風との関係に着目したもの。今回は、うちわをおおぐ動きと似ているフィンに目をつけた。4種類のフィンの模型を作製して実験を行ったところ、

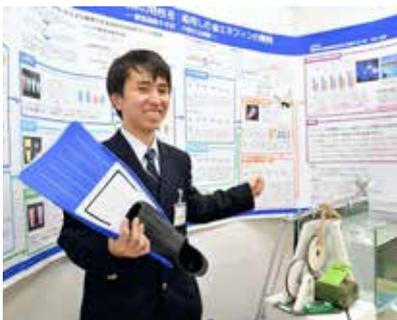


砂浜のキノコを研究した和田君

全体の30%がしなるフィンが最も前に進む力が大きく、消費電力も小さいことが分かった。

この実験成果を踏まえ、「しなる部分が3分の1」のフィンを作製し、水泳部員4人に体験してもらったら、平均約30%タイムが短縮できた。

小さい頃から科学が好きで、夏休みの自由研究でも疑問や仮説を徹底的に調べた。「今後、このフィンがなぜ効果的なのか、理解を深めていきたい」と抱負を語っていた。



速く泳げるフィンを開発した早川君

受賞者 敬称略、共同研究は団体名のみ

	中学	高校
内閣総理大臣賞	神戸市立上野中・和田匠平	京都市立塔南高・早川優希
文部科学大臣賞	秋田県由利本荘市立大内中科学部 福岡県小倉日新館中・西宮直志	兵庫県立柏原高理科部 鳥根県立益田高・福満和
環境大臣賞	東京都立小石川中等教育学校・増井真那	鹿児島県立国分高サイエンス部2年ツツク班
科学技術政策担当大臣賞	新潟県上越市立八千浦中・竹田琳香	栃木県立栃木高SSHクラブ物理班
全日本科学教育振興委員会賞	福井大学教育学部付属中・坂本孝義	青森県立青森南高自然科学部天文気象班
読売新聞社賞	岐阜県関市立緑ヶ丘中・山田駿佑	福岡県自由ヶ丘高・長野咲
科学技術振興機構賞	神戸市立近衛中・近藤真佳	東京都玉川学園高等部・柳田大我
日本科学未来館賞	千葉県船橋市立若松中・用松里海	福岡県立明善高物質化学プロジェクトチーム（化学部）
旭化成賞	新潟県長岡市立若吉中・佐藤小都里	宮城県仙台第三高・伊藤柚里
読売理工学院賞	千葉県松戸市立第一中・森本脩斗	愛媛県立三島高自然科学部
優秀賞	愛知県刈谷市立刈谷南中科学部竹皮班	大分県立大分鶴崎高科学同好会
	神奈川県川崎市立長沢中・鏡味怜	東京都佼成学園高・井川恭平
	茨城県立並木中等教育学校・市川尚人	茨城県茨城学園高科学部生物班
学校賞	埼玉県ふじみ野市立大井東中科学部	福井県立羽水高・平山勝大
	千葉県立稲毛高校付属中	静岡県立磐田南高
指導教諭賞	東京都八丈町立富士中・川畑喜照／広島県立府中高・岡本淳平	

講評 審査委員長 長浜嘉孝（愛媛大教授）

和田君の研究は、新種を明らかにするだけでなく、日本全国での分布状況や自宅近くの海岸での変遷を調べるなど、丁寧な研究が素晴らしい。早川君の研究も、推進力を増加させたフィンの開発に成功し、将来の特許取得、商品開発につながる期待される独創的研究だ。（談）

キャリアデザインセミナー 4回開催

マスコミ、金融、商社、メーカー 計285人参加

就職活動に取り組む大学生・大学院生を支援する「キャリアデザインセミナー」(読売新聞社主催)が2016年12月3日から今年1月14日にかけて、志望業種ごとに4回にわたって行われ、計285人の学生が参加した。金融、商社、メーカー各志望者向けの3回は東京・渋谷のダイヤモンド社石山記念ホールで、最終回のマスコミ志望者向けは東京・大手町の読売新聞東京本社で、それぞれ行われた。セミナーでは情報収集に関する講座などが行われた。参加した学生からは「新聞の重要性が分かった」などの声が寄せられ、大好評だった。



新聞を活用したグループワークを就活生に指導するキャリアラボの松田剛典代表理事

パネル討論で 内定者から生の声

セミナーでは毎回、各業界の内定者4人と採用担当者1人によるパネルディスカッションが行われた。コーディネ

ーターは人材育成に取り組む一般社団法人キャリアアラボ代表理事の松田剛典さん(初回のみ同法人の講師、西座由紀さん)が務めた。

内定者は、「就活ではいつどんな活動をしていたのか」「最終的に、なぜその会社で働こうと思ったのか」などについて、それぞれの体験談を率直な言葉で披露、参加した学生はメモを取りながら熱心に耳を傾けていた。

新聞活用の重要性学ぶ

この後の「業界研究講座」で、松田さんは社会への関心や接点を持つことの必要性を

強調。それによって、「選択肢が増える」「仕事内容や働く魅力を知ることができる」などのメリットがあると説いた。

その上で、社会と接点を持つためのツールとして、新聞活用の重要性を力説。マスコミの回では、新聞とスマホの両方を使ってニュースを確認するワークも行い、学生たちはその違いを実感しながら、新聞の読み方を学んでいた。

プログラム終了後、内定者や人事担当者に対する質疑応答タイムが設けられた。学生たちはお目当ての内定者を取り囲んで質問攻めに。内定者

はそれぞれの質問に丁寧に答え、学生たちは不安が解消された表情でうなずいていた。



パネルディスカッションで商社を目指したエピソードなどを生き生きと語る内定者たち。左端は住友商事人事部の原大祐さん

参加者の声

塚本千尋さん 東京家政大学家政学部3年
実際にどんな準備をしていたか具体的に聞けた。新聞などを通じて知識や情報を蓄えてこそ、就活も幅広く、深く行えると気づいた

小林友輝さん 信州大学経済学部3年
自分に足りないところが分かった。知識はただ持っているだけでは意味がなく、社会とどう関わっているかを知ることが大切だと痛感した

神明彩花さん 明治大学国際日本学部4年
インターンに参加するなど、足を使った活動を重視してきたが、社会との関連で情報を読み解いていくことも大事だと改めて認識した

小暮優斗さん 埼玉大学経済学部3年
一つのニュースでも、視点や考え方は様々だと、他の人と話してみても気づいた。新聞は継続して読むことが大事だとよく分かった

稲葉龍生さん 東京電機大学大学院1年
今まで何となく就活をしてきたが、先輩の話をよく聞くことが大事だと気づいた。自分の軸を固めるべく自己分析に力を入れようと思う

皆木虹南さん 専修大学文学部3年
セミナーって固いイメージがあったけど、関西弁の講師でなごやかで楽しかった。新聞も自分がどれだけ読んでいるか分かってためになった

飯塚恒成さん 専修大学文学部3年
新聞社を目指しているが、手探り状態の中で参加した。内定者や人事担当者の話をきいて、やるべきことが見えてきたような気がする

小西萌葉さん 立教大学コミュニティ福祉学部3年
ワークでは新聞、テレビ、SNSなど自分の思っている以上に情報を得ることができる媒体がたくさんあることに気づけた



マリー・ アントワネット展 を取材

長崎県立西陵高校新聞部

インターハイ新聞コンクールの副賞

「第3回高校新聞部インターハイ新聞コンクール」(読売新聞社主催)で優秀賞に選ばれた長崎県立西陵高校(諫早市)の新聞部員2人が2016年12月29日、東京都港区の森アーツセンターギャラリーを訪れ、開催中の「マリー・アントワネット展」(読売新聞社など主催)を取材した。このコンクールは、全国高校総体(インターハイ)やその予選を取り上げた学校新聞を対象にしたもので、展覧会の取材はコンクール入賞の副賞として行われた。

マリー・アントワネット展を取材する吉村さん(左)と野口さん

取材したのは、1年の吉村彩那さん(16)と野口紗希さん(16)。この日は午前中に展覧会を見学。音声ガイドを聞きながら、マリー・アントワネットに関連した美術品や遺品を食い入るように見つめ、説明書きなどを熱心に書き取っていた。見学後は、会場の外で来場者の感想を取材。女性には「マリー・アントワネットの夫ルイ16世と愛人フェルゼンのどちらが好きですか」などと質問していた。

「怖い絵」の中野京子さんにもインタビュー

午後は、千代田区の読売新聞東京本社に移動して、「美術品でたどるマリー・アントワネットの生涯」などの著書がある作家で独文学者の中野京子さんにインタビュー。2人は質問役とメモ役に分かれ、「アントワネットと母のマリア・テレジアはどういうところが違うのか」「アントワネットに会えるとしたら、どんなことを伝えたいか」など、事前に考えてきた10項目以上の質問をぶつけていた。

自分自身のことも聞かれた中野さんは「本当はミステリー作家になりましたけど、ものを書く仕事ができているので夢はかなったようなものです」と答え、「高校生になったら、可能

参加者募集

児童英語教師向けワークショップ

オックスフォード大学出版局は、英語指導のスキルアップをしたい先生や、英語教師を目指す人を対象とした無料ワークショップを2月から3月にかけて、東京、横浜、大阪、名古屋、松山、福岡、熊本、仙台、広島、千葉の全国10会場で開催します。

「教室の外でも英語を使ってみよう」と思わせる授業など、様々なアイデアを紹介。小学校の授業から英会話学校のクラスまで幅広く取り入れられる授業を体験しながら学ぶことができます。

英語教育分野での経験が豊富な教師トレーナーやベストセラー教材の著者など、多彩な専門家を招き、教科横断的な授業を展開するコツ、子供たちのための21世紀型スキルの指導法、読み聞かせの指導法などを取り上げます。なお、一部の会場ではワークショップがウェブ・カンファレンス方式で行われます。詳細およびお申し込みは、オックスフォード大学出版局のウェブサイトをご覧ください。

<https://www.oupjapan.co.jp/kidsclub/otws2017/index.shtml>



性は無限大だなんて思わず、自分のやりたいことの範囲で何かに集中して取り組んだほうがいい



中野京子さん(左)にインタビューする西陵高校新聞部の2人

い」とアドバイスしていた。取材を終えて、野口さんは「図録や本で見えていた作品を生で見ることでできて、その迫力に圧倒された。中野さんが気さくで丁寧に答えてくれたので、とても勉強になった」と話し、吉村さんは「貴重な絵をこんなに間近で見られるとは思ってなかった。会場に再現されたベルサイユ宮殿内の浴室が紙で作られていると、中野さんに聞いて驚いた」と感激していた。

取材の成果は次号の「西陵高校新聞」に掲載される予定だという。

関西大学で読書教養講座

本を読むことの喜びを学生たちと分かち合う「読書教養講座」（活字文化推進会議、関西大学主催）が2016年12月、大阪府吹田市の関西大学で2回にわたり開かれた。講師は女優で脚本や小説も手がける中江有里さんと、直木賞作家の道尾秀介さん。忘れられない本との出会いを語った。

慰めのための読書ある

中江有里さん

読売新聞社などによる21世紀活字文化プロジェクトの環境で、10日に開かれた中江さんの講座は一般にも公開された。「人生には慰めのための読書がある」と切り出した中江さんは、15歳で大阪から単身上京して芸能活動を始めた頃のエピソードを紹介した。ホームシックに加え、共通



中江有里さん

語での会話がうまくいかず、心を閉ざしかけていたとき、宮本輝さんの『道頓堀川』や『泥の河』に出会った。「読みながら私の中に、関西弁が再生されていくような感覚があった。気持ちを受けとめてくれるものがここにある。そのことが慰めだった」と話した。

映像化できない小説を

道尾秀介さん

16日に行われた道尾さんの



道尾秀介さん

講座は学生だけを対象とした。自分が小説を書くときのルールを「絶対に映像化できないこと」と述べた。高校2年で太宰治の『人間失格』を読み、冒頭の主人公の独白に「(映像として)見えないからこそ、見えてくるものがある」と、衝撃を受けた体験があるからだ。学生からの「書くときに大事にしていることは」の質問に、「自分の中になく感情は書かないこと」と答えた。「ちよつとした感情の種を、書きながら芽吹かせることはできる。たとえば『殺したい』と一瞬でも思ったことがあれば犯人の感情は書ける」と語り、聴衆に強い印象を残した。

葛西臨海水族園で高校・大学生向け講座

海の生態系 研究の最前線学が

東京都江戸川区の葛西臨海水族園で1月22日、海の生き物について学ぶ講座「海の学び舎 T H E ぶかぶか」が開催された。4回シリーズ最終回のこの日は、高校生から大学院生まで18人が参加。近くの浜でプランクトンを採取し、顕微鏡で観察した。同園は幅広い年代を対象とした環境教育に力を入れており、将来海に関する仕事を考える人の一助となることも狙いとしている。この講座も、高校、大学の壁を取り払った演習とともに、第一線の研究者による専門分野のレクチャーが好評で、質疑応答も活発



プランクトン採集用の専用ネットを海に投げ入れる参加者

に行われた。

この日講師を務めたのは、日本近海の親潮域を中心にプランクトンの調査・研究に取り組んでいる、中央水産研究所海洋・生態系研究センター長の杉崎宏哉さん(55)。「日本は、魚の餌となるプランクトンの標本だけでなく、何十年にもわたる水温など海域の様々なデータを蓄積している。これによって、水産資源のみならず、地球温暖化による海の生態系の変化を予想することもできる」と、調査研究の意義を丁寧に語った。

東京の私立高校2年の松田秀輝さんは「知識は自分でも得られるけど、この講座はじかに研究の最前線の話を知ることができる喜びがあった」と感想を語っていた。

学校・団体向けのプログラムについては、同園にご相談ください。問い合わせは教育普及係(代表 ☎ 03・3869・5152)へ。



杉崎宏哉さん

海外で学ぶ・リレーエッセー ②⑤

米ストーニーブルック大学

「ロングアイランドから見えてきた
新しい日本観」

啓明学院高校(神戸市)卒、ストーニーブルック大学3年(執筆時)

松本 佳恋^{かれん}さん

アメリカで日本文学について勉強していると言うと、わざわざアメリカまで行ってなぜ、という人もいます。けれど私はすば

らしい体験だと思っている。ストーリーブルックでの大学生活2年目に、もともとの専攻である経営学に加えて、アジア

学を専攻に、日本学を副専攻に追加することを決めた。たまたま取った日本文学の授業がとて

にすることを即断したのだ。では私が日本文学をあえてアメリカで学ぶのはなぜか。まず、この大学での日本文学の授業は日本語の授業以外、全てアメリカ人教授によって行われている。日本について日本人が、アメリカでアメリカ人から学ぶ。これは日本の大学ではなかなかできない経験だ。

また、日本文学の授業を取っている生徒が日本や日本の文化に関心を持っているというのも魅力の一つだ。様々な国籍やバックグラウンドを持った生徒が授業で述べる日本についての意見は興味深く考えさせられるものばかり。「古事記ってギリシヤ神話に似ているよね!」と言った生徒がいた。この意見には目をみはった。

日本学を専攻している利点は日本を好きな人たちに会える、ということでもある。日本人がいかに礼儀正しくて、日本のものはどんなにきれいでかわいいか、など日本についてのいいことを聞いて、どれほど幸せな気分になれるかがわかった。

ユニークさが日本では長所とは思われず、みんなと同じように、といわれることに違和感があったので、正直、日本は居心地が悪いな、と思うこともあった。しかし、日本のいいものや、

日本人であることを誇らしく思うべきだ、ということ友達から教えてもらった。

授業で扱われる教材の多くも森鷗外の「キタ・セクスアリス」や長塚節の「土」など私が日本では読まなかった本だったことにも驚いた。

大学で経営学、文化の違い、英語のほか、一人の日本人として知るべき大切なものを学んでいる。それは日本文化の美しさであり、母国を見直す機会を与えてもらったことなのだ。

今はまだ、将来何をしたいか、想像もつかない。ただ、これからのことを考えるのが楽しみでしかたがない。だからこそ今はただストーニーブルック大学で出会った大好きな友達と一緒に、残りの学生生活を一生懸命楽しみたいと思っている。

(会報編集部抄訳 The Japan News 2016年7月17日)



大学のマスコットと松本さん(左)=本人提供



ストーニーブルック大学

1957年創立。ニューヨーク州ロングアイランド北岸にあるニューヨーク州立大学。世界大学ランキングによれば、トップ1%に入る高等教育機関。



RYUGAKU FELLOWSHIP

海外留学を目指す高校生に進学支援を行っているNPO法人「留学フェロウシップ」のメンバーが、海外のキャンパスライフをリレー連載します。留学フェロウシップの詳細はウェブサイト(<http://ryu-fellow.org>)へ。

英語の原文は <http://the-japan-news.com/news/article/0003030579> でお読みいただけます。